

1 課題名 養殖衛生管理体制整備事業（海面）

2 区分 国交付金（国費：県費＝1：1）

3 期間 平成15～26年度

4 担当 増養殖部（堅田昌英）

5 目的

養殖魚介類の防疫指導を適切に行うことで疾病のまん延防止を図り、安心・安全な生産・供給体制を確立する。

6 成果の要約

（1）成果の概要

養殖場の巡回指導 県内を北部（湯浅湾・由良湾）、中部（田辺湾）、南部（串本浅海漁場・大島・須江養殖漁場）および東部（浦神湾・勝浦湾）の4海域に分け、毎月1回ずつ防疫パトロールを実施した。

水産用医薬品残留検査 マダイ養殖における水産用医薬品適正使用指導に資するため、平成21年7月6日・7日に養殖マダイを田辺湾（1歳魚、平均魚体重1.0 kg）および串本浅海漁場（2歳魚、魚体重1.8 kg）から5尾ずつサンプリングし、筋肉中の塩酸オキシテトラサイクリンの残留検査を行ったが、いずれも検出されなかった。

魚病検査

①**持ち込み病魚の検査** 検査件数は9魚種60件であった。

魚種別ではマダイが20件で最も多く、次いでシマアジおよびクエがそれぞれ10件、ヒラメ6件で、これら4魚種で全体の約76.7%を占めていた。月別に見ると7～10月の高温期に多く、毎月8～10件の検査を行った。

②**魚種別魚病発生状況** カンパチでは7月に連鎖球菌症、8月および10月にイリドウイルス病が1件ずつ発生した。

マダイではイリドウイルス病が8～11月にかけて、単独およびエピテリオシスチス症や寄生虫病との合併症で5件発生した。細菌病は単独およびウイルス病や寄生虫病との合併症で14件見られ、そのうち、エドワジエラ症1件、滑走細菌症6件、腹部膨満症1件、エピテリオシスチス症6件であった。寄生虫病は発生件数14件で、ビバギナ、ラメロディスカス、クビナガ鉤頭虫および海産白点虫の寄生が見られ、近年多様化している。

ヒラメではエドワジエラ症が5月、7月、10月および11月に単独および合併症で合計5件発生した他、7月に連鎖球菌症が合併症で1件発生した。寄生虫病はイクチオボド症が10月および11月に1件ずつ発生し、2月にはスクーチカ症が見られた。

トラフグではイリドウイルス病が単独および合併症で7月および9月に1件ずつ発生した。寄生虫病は9月および11月にヘテロボツリウムの寄生が見られ、11月には合併症で粘液胞子虫性やせ病が発生した。

シマアジではイリドウイルス病が9月および11月に単独および合併症で合計4件、ウイルス性神経壊死症が12月～翌年3月にかけて4件発生した。また、4月には環境障害（赤潮）による死亡が見られた他、8月にはトリコジナ症が発生し

た。

クエでは7月、9月および10月にウイルス性神経壊死症が1件ずつ、9月および10月にイリドウイルス病が単独および合併症で合計3件発生した。細菌病は、滑走細菌症が10月および3月に1件ずつ見られた。また、寄生虫病は4月にトリコジナ症が1件見られ、8月および10月には陸上水槽で中間育成中に海産白点病が1件ずつ発生した。

イシダイではイリドウイルス病が7月および8月に1件ずつ発生した他、5月にベネデニア症がトリコジナとの合併症で1件見られた。

イサキでは8月にイリドウイルス病が1件発生した他、7月および8月に陸上水槽で中間育成中に海産白点病が1件ずつ見られた。

メガイアワビでは5月および8月にビブリオ病が1件ずつ発生し、多くの死亡が見られた。

健康診断

診断件数は10魚種49件であった。このうち、水産用ワクチン接種に関係した健康診断は4魚種6件であった。

魚種別に見ると、マダイが中間魚と稚魚を合わせて26件で最も多く、他の魚種は7件以下であった。マダイ稚魚ではエピテリオシスチス、ビバギナ、ラメロディスカスおよびトリコジナの寄生が確認され、中間魚ではクビナガ鉤頭虫の寄生が見られた。マサバ中間魚では11月に肝臓外側にアニサキスの寄生が認められた。また、nested PCRでシマアジ産卵親魚卵巢中のベータノダウイルス保有検査を4月、6月および7月に実施したところ、いずれも陽性であった。

7 成果の取り扱い

（1）成果の普及

防疫パトロールで魚病対策指導および水産用医薬品の適正使用指導を行った。

（2）成果の発表

平成21年度瀬戸内海・四国ブロック魚病検討会

平成21年度養殖衛生管理体制整備事業太平洋ブロック地域合同検討会

平成21年度県内養殖衛生対策会議